

# 大学初年次生に対する 入門的フィールドワーク実践の成果と課題

淡野 寧彦<sup>1)</sup>

1) 愛媛大学法文学部人文学科

## Achievements and Problems of Introductory Fieldworks for First Year Course

Yasuhiko Tanno<sup>1)</sup>

1) Ehime University, the faculty of law and letters, humanities

### 1. はじめに

近年、学生教育におけるフィールドワーク<sup>[1]</sup>の重要性が指摘されている。文部科学省(2012)<sup>[1]</sup>によって示された『大学改革実行プラン』においては、「激しく変化する社会における大学の機能の再構築」に向けた大学教育の質的転換を図る方法の1つとして、「学生の『主体的な学び』を拡大する教育方法の革新(参加型授業、フィールドワーク等)」が記されている。フィールドワークでは、従来の授業では見聞きしたり体験したりできない事象について、学生が直接的に学ぶ機会が多くあり、大学が社会との関係性を強化するうえでも重要な手段である。愛媛大学が2016年度より開設予定の「社会共創学部」においても、地域のステークホルダーらとともにを行うフィールドワークが教育体系の重要な柱となっている。

ところで、フィールドワークを主な調査・研究手法とする学術研究においては、例えば筆者が専門とする地理学の場合に限っても、フィールドワークの技術は個々の研究者が自らの熟練によって向上させるものとする見方が強く、その技術や手法を一般化したり社会に還元したりするという意識は希薄であった。しかし最近では、日本地理学会(2013)<sup>[2]</sup>の『E-Journal GEO』第8号における「特集 フィールドワークと地理学知の還元」や、筑波大学人文地理学研究グループ(2014)<sup>[3]</sup>の『人文地理学研究』第34号における「特集 フィールドワーク方法論の体系化—データの取得・管理・分析・流通に関する研究—」など、フィールドワークの実践やその成果の活用に関する幅広いフレームワークの構築が進められている。さらに日本地理学会で

は、主に大学生を対象とした「地域調査士」資格の設置および認定を実施しているほか、関連分野である社会学においても、これに先行して「社会調査士」資格の設置・認定を行っている。これらの資格はいずれも、様々な社会事象や地域の諸相について一定の専門性を持って調査・分析できる能力を有する者に与えられるものであり、フィールドワークの技術は、資格認定を受けるうえで必須のものといえる。そしてこのようなフィールドワークを取り入れた活動によって、学生の当事者意識が高まるだけでなく、フィールドワークが大学生による地域貢献活動として当該地域において認知され、関係機関からも協力が得られるという好循環も発生している(野島, 2015)<sup>[4]</sup>。また柴田(2009)<sup>[5]</sup>は、フィールドワークの上位概念と位置づけられる社会調査は、マーケティングや世論調査、政策立案に向けた情報収集など、現代社会の様々な事象を探るうえで重要性を増していることを指摘している。これらとともに先述の野島(2015)は、フィールドワークを効果的に実現するための条件として、学生の経済的負担や学外でのリスクの軽減、指導者の確保などを挙げている。

また、これまでフィールドワークが実施されることの少なかった様々な学術分野においても、近年では学生が社会の動向を直接見聞きし、主体的に考え行動するための手段としてフィールドワークが組み込まれつつある。その例として出原・伊丸岡(2012)<sup>[6]</sup>は、情報技術およびデザイン分野の研究視点をもとに、金沢市の伝統工芸品の価値認識向上に向けてフィールドワークを活用した産官学連携を実施した。この結果、学生らが工芸職人との会話や工芸品の製作体験などを通じて、生産者の視点や生活者の視点な

ど、多角的な見方によって自身の知識・技術を活用し、工芸品の特徴や良質さを効果的にアピールする企画を生み出すことが明らかにされた。また、学生に対する環境教育の視点から、尾崎ほか (2010)<sup>7)</sup>およびランプレヒトほか (2010)<sup>8)</sup>はドイツにおけるフィールドワークを実施した。その結果、現地の市民らを持つ環境意識の実態や日本人との違いなどを学生らが聞き取り調査をもとに収集・実感するとともに、こうした経験を自身のライフスタイルの検討にも活用しようとする意識が高まることが明らかにされた。医学分野においても、地域社会や周辺の自然におけるフィールドワークの実施が、医療者をめざす学生に他者との共通感覚をもたらし、人々の生活や社会の動向などに学生が強い関心を示すようになったことが指摘されている(道信, 2015)<sup>9)</sup>。

以上のように、フィールドワークの実行能力やそれによって得られる成果の活用は、学術研究に限らず、社会全体のなかで今後ますます重視されるものと想定される。一方で、フィールドワークを取り入れた授業は大学教育においてまだ少数である。大学教育におけるフィールドワークの機会を増やすと同時に、高い教育効果を実現するための方法について、実践的な検討が必要と考えられる。そこで本稿では、筆者が愛媛大学法文学部人文学科1回生を対象に2014年度後期に担当した「新入生セミナーB」において実施した入門的なフィールドワークを素材として、大学教育におけるフィールドワーク実践の成果と課題について考察することを目的とする。

本稿の構成に沿って研究方法を示すと、まず2章において、当該授業の内容を示しながら、フィールドワークの実施方法について記述する。3章では、受講学生に対して実施した振り返りアンケートの内容から、フィールドワークに関する事前準備や事後の成果まとめの実施状況について、グループ単位および個人単位での振り返りアンケートの回答をもとに検討する。また、授業において体験したフィールドワークに対するコメントについても、主だったものを取り上げる。これらをふまえ、4章でフィールドワーク実践の成果と課題について考察する。なおページ数の関係もあって省略したが、学生によるフィールドワークの成果報告には興味深いものも複数みられたことをあらかじめ付記しておく。

## 2. フィールドワークの実施状況

### 2.1. フィールドワークの方法

本授業の受講学生<sup>[2]</sup>は20人であり、1回のフィールドワークにつき、4人1組で5つの班を設けた<sup>[3]</sup>。授業スケジュールとして、まず、対象とする松山市の概況やフィールドワークの基礎的な知識・方法、フィールドワークによる成果をまとめる方法などについて講義した(表1)。こ

表1 授業スケジュールとその内容

回	月日	内容・対象地域	
①	9月29日(月)	オリエンテーション	
②	10月6日(月)	松山市に関する概説	
③	10月14日(火)	事前準備報告	大街道 商店街
④	10月20日(月)	現地調査	
⑤	10月27日(月)	調査成果報告	
⑥	11月17日(月)	事前準備報告	ロープウェイ街 ・松山城
⑦	11月26日(水)	現地調査	
⑧	12月1日(月)	調査成果報告	道後温泉
⑨	12月8日(月)	事前準備報告	
⑩	12月15日(月)	現地調査	
⑪	12月22日(月)	調査成果報告	平和通 周辺
⑫	1月19日(月)	事前準備報告	
⑬	1月26日(月)	現地調査	
⑭	2月2日(月)	調査成果報告	
⑮	2月9日(月)	授業のまとめ	

(受講学生に対するアンケート調査により作成)  
第3回および第7回授業は、ともに月曜授業実施対象日。  
10月13日、11月3日、1月12日は祝日、11月10日は大学祭片付け作業のため、12月29日、1月5日は冬期休暇のため、それぞれ授業なし。

の際、フィールドワークに適した服装や必要な持ち物、協力者らへのマナーなどについて確認するとともに、筆者が法文学部人文学科地理学専攻の2・3回生向けに実施した地域文化実験演習Aにおけるフィールドワークをもとに作成した70ページほどの報告書を回覧し、フィールドワークの成果として例示した<sup>[4]</sup>。

そのうえで、1つの対象地域について、事前準備報告・現地調査・調査成果報告の3回分を1セットとしたフィールドワークを実施した。事前準備報告および調査成果報告の際には、各班であらかじめ検討した内容をまとめた配布資料(A3用紙1~2枚)を活用したプレゼンテーションを実施した。事前準備の段階では、対象とする地域・事象に関する文献やインターネットからの情報を収集し、どのようなテーマについて限られた時間のなかで調査可能であるかを、具体的な調査項目を定めながら検討するよう求めた。この内容を事前準備報告におけるプレゼンテーションから教員が精査し、必要に応じてアンケート用紙を作成するなどの準備を進めた。また、対象地域の地図のコピー2枚程度を各学生に配布し、店舗構成・土地利用の調査で利用するほか、現地で気が付いたことなどを地図中に書き込み、成果報告の際に活用するよう求めた。

現地調査に際しては、筆者の専門とする地理学的調査を主とし、景観観察やアンケート調査、聞き取り調査などによって情報を収集した。現地調査当日は、2限(10:20~11:50)開始前に愛媛大学正門前に全員が集合の後、教員(筆者)の引率によって対象地域へ移動したほか、現地では法文学部人文学科地理学専攻学生2人に調査補助の助力

を得た。

得られた情報をまとめるにあたっては、店舗構成・土地利用の状況については、先述の報告書などを参考に、業種別のマークなどを地図中に示すなどして、なるべく可視的なプレゼンテーションとなるよう、学生にあらかじめ求めた。また、アンケート調査のデータ分析に際しては、授業時間とは別に、該当する班の学生らに Excel を用いたデータ入力と集計作業に関する基礎的な方法を教示した。このほか、現地では撮影した写真をプレゼンテーションの際に効果的に活用し、聞き手がなるべくわかりやすくかつ興味を持てる内容となるよう、工夫を求めた。

## 2.2. フィールドワークの対象地域と調査内容

学外におけるフィールドワークの対象地域として、授業時間中の90分以内に移動および活動が可能となることを考慮して、大街道、ロープウェー街・松山城、道後温泉、平和通周辺の4つを選定した(図1)。そのうえで、各地域において下記の現地調査を実施した。

### 【大街道】

- (1) 大街道の歴史と過去の足跡
- (2) 大街道北部の店舗構成・土地利用
- (3) 大街道南部の店舗構成・土地利用
- (4) 大街道の来訪者の特徴(アンケート)
- (5) 大街道来訪者の自転車マナー(学生によるテーマ設定)

### 【ロープウェー街・松山城】

- (1) ロープウェー街のまちづくり、歴史との関係
- (2) ロープウェー街の店舗構成・土地利用
- (3) ロープウェー街の来訪者の特徴(アンケート)
- (4) 松山城の歴史と現在の利用状況
- (5) 松山城から見た松山市街地の現況

### 【道後温泉】

- (1) 道後温泉の歴史と過去の足跡
- (2) 道後商店街の店舗構成・土地利用
- (3) 道後温泉の来訪者の特徴(アンケート)



図1 フィールドワーク対象地域

- (4) 道後温泉周辺部における観光資源
- (5) 伊佐庭如矢の足跡(学生によるテーマ設定)

### 【平和通周辺】

- (1) 平和通の歴史とまちづくり
- (2) 平和通北側の店舗構成・土地利用
- (3) 平和通南側の店舗構成・土地利用
- (4) 平和通周辺北部の飲食店の分布
- (5) 平和通周辺南部の飲食店の分布

## 3. フィールドワークに対する学生の意識

### 3.1. 振り返りアンケートの実施内容

各対象地域に関する調査成果報告が終了した次の授業時に、受講学生に対する教育効果の向上とフィールドワークに対する意識や感想などの把握を目的として、グループ版と個人版の振り返りアンケートを実施した。グループ版では、班の代表者1人に対して、事前準備および成果まとめのために班のメンバーが集まった日時と場所を記入してもらうとともに、「班メンバーが集まる時間を調整すること」、「班メンバーが集まる場所を調整すること」、「発表のための資料を班でまとめて作成すること」の3項目について、それぞれ「かなり順調にできた」、「まあ順調にできた」、「やや難しかった」、「かなり難しかった」のいずれか1つを回答してもらった。一方、個人版は全学生に対して実施し、7つの項目について質問した。すなわち本テーマについて、「チームで作業することで、自分だけでは気づかなかった発見や発想が出た」、「チームでの作業に積極的に取り組むことができた」、「フィールドワークを通じて、地域の様々な事象について考えることができた」のそれぞれについて「かなり当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」のいずれか1つを、また「事前の準備作業の難易度」、「現地でのフィールドワークの難易度」、「成果まとめ作業・報告の難易度」、「チームでの作業と、他の課題や活動を行うための時間調整」のそれぞれについて「かなり順調にできた」、「まあ順調にできた」、「やや難しかった」、「かなり難しかった」のいずれか1つを回答してもらった。これらとともに、当該フィールドワークで、学生がとくに関心を持ったことや努力したこと、難しく感じたことなどについて、なるべく具体的な記述をもとめた。アンケートに要した時間は、1回あたり10分程度であった。

### 3.2. フィールドワークに関わる作業状況と学生の意識

対象地域ごとのフィールドワークについて、班単位での事前準備や成果まとめの実施状況や作業の難易度を表2にまとめた。事前準備、成果まとめのいずれの作業でも、学生らが集まって検討する回数は各1回が通常であり、各作

表2 フィールドワークのための事前準備および成果まとめ作業の状況

対象地域	事前準備作業		成果まとめ作業		作業等の難易度(点数化)		
	ミーティング 回数平均	1班あたり 所要時間平均	ミーティング 回数平均	1班あたり 所要時間平均	集合時間 調整	集合場所 確保	作業全体
大街道	1.0回	1.4時間	0.8回	1.9時間	2.6	3.4	2.4
ロープウェー街・松山城	1.0回	1.1時間	1.0回	2.2時間	1.8	3.4	1.4
道後温泉	1.0回	1.8時間	1.0回	2.2時間	1.8	3.2	2.6
平和通 周辺	0.8回	1.4時間	1.4回	1.4時間	2.4	3.2	3.0

(受講学生に対する振り返りアンケートにより作成)  
ミーティング回数平均が1.0回を下回るのは、同じ場所には集まらず、ウェブ上のLINEなどによって打ち合わせ等を行ったとした回答を、回数に含めなかったためである。  
作業等の難易度の点数化については、「かなり難しかった」を1点、「やや難しかった」を2点、「まあ順調にできた」を3点、「かなり順調にできた」を4点とし、全ての班の合計値を班数で割った点数とした。

業に1～2時間を要していた。なお、集合して作業しなかった班では、ウェブ上のLINEによる打ち合わせや情報交換が行われた。作業に使用した場所の回答としては、のべ利用回数が21回の図書館内の学習室と、同20回のメディアセンター内の交流スペースの2カ所にはほぼ集約された。

作業等の難易度について、「かなり難しかった」を1点、「やや難しかった」を2点、「まあ順調にできた」を3点、「かなり順調にできた」4点と、段階的に点数化して検討すると、集合時間の調整ではロープウェー街・松山城および道後温泉のフィールドワークでともに1.8点と、比較的困難を感じていた。このうち前者では、作業全体の難易度も1.4点となった。この要因として、ロープウェー街・松山城のフィールドワークでは、11月26日(水)に現地調査を実施した後、翌週の12月1日(月)に成果報告を行うこととなり、準備のための日数が少なかったことが考えられる。一方で、ロープウェー街・松山城のフィールドワークを除くと、作業全体の難易度を示す点数は次第に上がっていることから、経験を積むうちにフィールドワークに関する技術等が向上したことが推測される。また、集合場所の確保についてはどのフィールドワークでも高い点数となっていた。先述のとおり、打ち合わせを行う場所は学内の主に2カ所に集約されていたことから、学生が集まって検討するためのスペースが学内に存在し、学生らもそのことを認識しているものと推察された。

次に、個人版のアンケート結果から学生のフィールドワークに対する意識をみると、「チームで作業することで、自分だけでは気づかなかった発見や発想が出た」、「チームでの作業に積極的に取り組むことができた」、「フィールドワークを通じて、地域の様々な事象について考えることができた」の3つの項目において、全ての回で「かなり当てはまる」と「やや当てはまる」の合計が回答の80%以上を占めた(図2)。一方、「事前の準備作業の難易度」、「現地でのフィールドワークの難易度」、「成果まとめ作業・報告の難易度」では、20～40%の学生が「やや難しかった」ないし「かなり難しかった」と回答した。とくに成果をまと

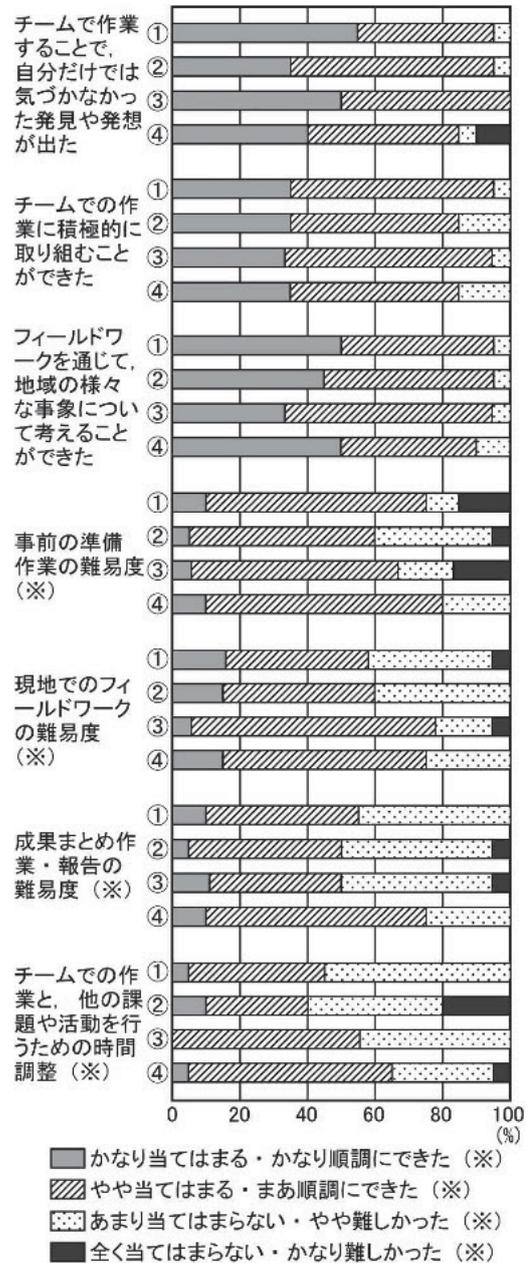


図2 各回のフィールドワークに対する学生の意識

(アンケート調査により作成)

丸数字は第1～4回のフィールドワークにそれぞれ該当、質問項目のうち、(※)を付したものは、凡例の回答が後者のものを指す。

める際に困難を感じた学生が多かったが、「かなり難しかった」のみでは事前の準備作業に対する回答が多い傾向にあった。ただし、現地でのフィールドワークに関しては、回を重ねるごとに困難を感じた学生の割合は低下傾向にあり、経験による習熟がうかがえた。他の課題や活動との時間調整については、40%前後の学生が「やや難しかった」ないし「かなり難しかった」と回答しており、今回の一連のフィールドワークが、学生にとってやや余裕のないスケジュールとなっていることを示唆していた。ただし、先述の現地でのフィールドワークの難易度と同様に、回を重ねるごとに時間調整に困難を感じる学生の割合は低下傾向にあった。

最後に、自由記述欄に記した学生のコメントからも、フィールドワークに対する意識を検討する。まず、事前の準備や現地での調査においては、現地調査を「事前調査なしで行ったところで何もできない」(原文ママ、以下同じ)、「人に何かを尋ねる時に、相手に分かりやすく簡単に質問できるかどうか」、「アンケート調査は思っていたより楽しなかった」などのように、事前の準備の重要性や実際に調査を行ううえでの苦労を体感するとともに、いかにして有効な情報を収集しうるかについても考えを持つ回答がみられた。また、「通りがかりの人に話しかけてアンケートを行うというのも初めてで、最初はどのように話しかければ良いか分からずかなり苦戦しました。しかし、地理学の先輩に教えてもらいできるようになった時は嬉しかったです」のように、上級生からの助言による技術習得や学習意欲の向上も示された。現地での調査によって得られた結果については、道後温泉での来訪者に対するアンケート調査から、「県外客の方が多かったことと団体客よりもご夫婦やご友人で来られている方が多いことを初めて知りました」といった発見や、平和通周辺での調査から「普段使っている道にも全く知らなかった店舗があったり、一軒家の数の多さが想像以上で驚きました」といった具体的な気づきが挙げられた。さらにこうした体験から、「座学だけでは分からないその土地の雰囲気」や「実際に街に出てみないと分からないことって、インターネットがすごく充実している現代にもあるのだな」という実感を持つ学生も存在した。

フィールドワークによる成果のまとめ作業や報告についても、「分析を行うには何らかの問題意識をもつことが必要だと感じた」という実感や、「考察の仕方などは、最初のころと比べると、だんだん分かってきた。また、他のチームの意見を聞くことで、さまざまな考え方があることに改めて気づいた」のように、自身のグループで取り上げたテーマだけでなく、他のテーマについての関心の高まり、そして「チームでの作業はみんなの予定が合わなくて大変でしたが、完成した発表はなかなか満足のいくものができました」といったフィールドワークを通じた達成感などもたらされていることが明らかになった。そして、フィー

ルドワークを通じて得られた社会の見方や社会人としての意識として、「普段何気なく通っている道にも過去に何があって現在の姿があるかを知ることができて、まちづくりの効果や、地元の人の協力がいかに大切かを学ぶことができました」や、「まちづくりに対してすごく興味が湧きました」、「現在閉店しているお店は次はどのようなお店になるのか、これからのロープウエー街の店舗構成に興味がありました」といった社会動向への注視や関心の高まり、また当該地域を「いつもと違う目線から客観的に観ることができ」たことや、「フィールドワークで知ったこと、感じたことをきちんとまとめて人前に出る必要を知りました」といった自身が社会と積極的にかかわり、情報を収集・発信していくことの重要性を記した意見も存在した。

#### 4. フィールドワーク実践の成果と課題 —むすびにかえて—

前章までに記した大学初年次生を対象としたフィールドワークの実践から、大学教育におけるフィールドワークの成果と課題について考察し、本稿のむすびとする。

今回実施した愛媛大学近辺におけるフィールドワークに対して、受講した学生からは、様々な発見が得られたことや、調査・分析に関する一通りの流れの把握や基礎的な知識が得られたこと、グループワークを通じて社会の諸現象に対する考察を実施できたことなど、学内の講義形式による授業のみでは十分に体験できない内容について高い評価が得られた。今回のフィールドワークは、筆者自身の研究方法である現地での調査活動を主としたため、その実施や事前事後の作業について困難を感じる回答も少なからず存在したものの、フィールドワーク経験のほとんどない学生に対してであっても、一定の学習効果やフィールドワーク自体への関心の高まりなどがみられた。以上より、学生らが、社会の動向について自身の生活や行動と関連付けてとらえ、大学での学びや社会人としての意識を高めていくうえで、フィールドワークを通じた経験は重要な意味を持つと考えられる。

他方、今回のフィールドワークの実践を通じて、複数の課題の存在も指摘できる。まず1点目に、現地での活動において、教員1人のみでの監督や調査に関する助言を行うことの限界が挙げられる。大学近辺での活動とはいえ、受講学生全体による行動範囲や活動内容は広く、全ての学生に教員が随行することは不可能である。こうしたなかで、事前準備をしても、学生が事物の見落としやどのように記録してよいかわからない状態になった場合のフォローには限界がある。また、事故防止などの安全確保にも十分に注意を払う必要がある。こうした課題の解決のためには、今回のフィールドワークでも実施したが、上級生の学生などによるアシスタントの活用やそのための仕組みづく

りが必要となる。

2点目には、フィールドワークによる成果の社会還元が困難であることが挙げられる。通常の授業時間帯のなかでフィールドワークを実施する場合、大学近辺に限られた地域や施設を訪れることしかできない。その結果、フィールドワークを受け入れる側の負担が増えることが危惧される一方で、短時間での調査・見学や学生の技術的な未熟さなどから、フィールドワークによって得られた成果の還元は難しい。また、フィールドワークの訪問先が過度に固定化すれば、学生にとっても新鮮味の乏しい体験となり、フィールドワーク自体の有用性が低下しかねない。これらのことから、フィールドワークの実施に際しては、十分な実施時間の確保のための弾力的な措置や、今回実施した調査活動による場合だけでなく、地域住民らによる集会活動への参加や、ボランティア活動への協力など、多様な形態がとられる必要がある。

これらをふまえた3点目の課題として、学外での諸活動に単発的に参加したという経験にとどまらず、学生が実社会のなかでどのように自身の力を発揮したり自ら考えて行動したりできるのか、といった意識や意欲にまで結び付けていく教育上の仕掛けも必要であろう。

大学教育の一層の充実や社会との関係性の強化を図るために、フィールドワークを通じた教育効果の向上について、今後も実践を通じた検討を続けたい。

## 注

[1] フィールドワークとは、例えば『デジタル大辞泉』によれば「野外など現地での実態に即した調査・研究。野外調査。」と簡潔に定義される。ただし、調査の目的や研究分野の違いによって、フィールドワークの方法や重視する内容などには差異が存在する。本稿ではフィールドワークの手法自体についての議論はせず、大学教育において行われる講義形式の授業（いわゆる、座学）とは異なり、大学外での観察や聞き取り、およびそのための事前準備や事後の成果まとめなどをフィールドワークと位置づける。

[2] 受講学生は1年次前期の履修授業選択時に、授業内容の異なる6つの「新入生セミナーB」のなかから、自身が関心を持つものを選ぶ。人数超過による調整等が必要に応じて行われるものの、本授業にはフィールドワークに比較的高い関心の高い学生が多く参加しているとみなされる。

[3] 様々なテーマについて、毎回異なるメンバーによって調査することを目的に、班を構成する学生は、毎回、くじ引きによって変更した。

[4] 無論、本授業で実施したフィールドワークから、この報告書と同程度のものを作成することを求めるわけではない旨も合わせて伝えた。フィールドワークによって、学生自身がどのようなことが実現可能であるのか、その身近な一例として提示することが目的であった。なお、回覧したものは2013年9月に実施した徳島市とその周辺部におけるフィールドワークの成果をまとめた『2013年度地域文化実験演習A（徳島巡

検）報告書』である。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2012) : 『大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～』。 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/06/\\_icsFiles/afieldfile/2012/06/05/1312798\\_02\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/_icsFiles/afieldfile/2012/06/05/1312798_02_2.pdf) 最終閲覧日: 2015年9月30日)
- 2) 日本地理学会 (2013) : 「特集 フィールドワークと地理学知の還元」『E-Journal GEO』8, 1-65.
- 3) 筑波大学人文地理学研究グループ (2014) : 「特集 フィールドワーク方法論の体系化-データの取得・管理・分析・流通に関する研究-」『人文地理学研究』34, 1-254.
- 4) 野島章吾 (2015) : 「大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義: 関西学院大学総合政策学部白山麓実習5年間の活動から」『総合政策研究』49, 87-119.
- 5) 柴田邦臣 (2009) : 「社会調査と“現場”の関係-方法論としてのフィールドワークを再考する-」『社会情報学研究』18, 81-90.
- 6) 出原立子, 伊丸岡俊秀 (2012) : 「産官学連携による地域社会の価値を創出する教育」『工学教育研究』19, 61-70.
- 7) 尾崎司, 塩瀬治, 鈴木哲也, ランプレヒト・マティアス (2010) : 「環境教育におけるフィールドワーク(1)-環境都市フライブルクにおける学外授業-」『東京家政大学研究紀要』50, 11-17.
- 8) ランプレヒト・マティアス, 塩瀬治, 鈴木哲也, 尾崎司 (2010) : 「環境教育におけるフィールドワーク(2)-学生の学びとその意義-」『東京家政大学研究紀要』50, 41-47.
- 9) 道信良子 (2015) : 「フィールドで育む共通感覚-日本の医学教育において人文・社会科学の視点を育成するための方法-」『医学教育』46, 322-328.